

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 283 号

2025 年 11 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28

山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「ピリピ書・コロサイ書講解説教」より (5)

ピリピ書は一致せよということを教える

ピリピ書は、「一致せよ」と言うことを教えている書物であります。もちろん、これはピリピからパウロに贈り物をしましたから、贈り物のお礼でありますけれども、内容は教えて、「君ら、一致せよ、「信仰に堅く立て」、「復活の希望に立て」と言うことを教えている書物であります、いかにも人間は、口では天国と言っておりますけれども、天国は欲しくない。この世のものが欲しい。人に褒められたい、善行したい。学問がほしい、ものが欲しいというのが人間の心です。天国は欲しくない。しかしキリスト教は、天国に帰ることを教える宗教です。

へりくだった心

「何事も党派心や虚栄心からするのでなく、へりくだった心をもって互いに人を自分より優れたものとしなさい。」（ピリピ 6 章 3 節）

「へりくだった心をもって」の「へりくだった心」という字、謙遜と言う字は、キリスト教が現れ、十字架の福音が現れて、初めてギリシア語に現れてきた。それまでなかったが、キリスト教の救いが現れてできた字です。これを日本語に約して「謙遜」と言うだけでは意味が出ていない。キリスト教ができて初めてできた謙遜ですから、「キリスト教的謙遜」と言わなければいけない。それまでは、そういう精神は存在しなかった。キリスト教の福音が現れた結果として出来たキリスト教的謙遜、「ターペイノフロスーネ」という字は、原語で言った方がよろしい。キリスト教独特の字です。このキリスト教的謙遜「ターペイノフロスーネ」という字は、復活の希望と裏表になっている。復活の希望なくして、この謙遜は表れてこない。

キリスト教は天国へ帰る者となること

キリスト教というものは天国へ帰る者となることです。その他のことではありません。今日歌いました讃美歌 54 番(よろこびの日よ)

「天なる家に帰る日まで、この日の幸を歌い続け」。天なる家に帰り日、帰る者になる、ならして頂く、これをキリスト教と言う、これをちょっと見れば、足が地についていない。天国のことを言えば、この地上のことをないがしろにしているように見えますけれど、事実、これが本当に現実を解決する鍵です。

しかし、人間は、そんなものは欲しくない。人間は衣食住が問題です。イエスは、「豚に真珠を与えるなかれ」と仰せになりました（マタイ伝 7 章 6 節）が、我々は真珠はほしくない。しかし、聖霊なる神がわれわれに臨む時に、われわれみたいな者でも豚でも真珠が欲しくなる。現に私のようなこんな豚でも、キリストが天国へ迎えてくださるということは疑わない。信じます。これは聖霊の働きです。

キリスト教の教えは高い。非常に高い。真珠の教えですから、人間には不可能です。人間には不可能だけれども、聖霊我らに臨むときに、われらは「イエスは主なり」、「贖い主なり」と告白はできる。祈る、聖霊豊に高円寺東教会に満ち給わんことを。

ピリピ書は、復活の信仰に立てと教える

コリント前書を見ても、パウロ自身から学んだ信者がごたごたやっている。ピリピ書も「ごたごたやっているから一つになれ」と言うことを教えた書簡ですよ。ピリピ教会ではごたごたやっている。パウロの信仰が分かっていない。そうですから、これは「お前たちは復活の信仰に立て」ということを書いた書簡です。ピリピ教会は、パウロに贈り物をしたから、パウロはその贈り物に対する感謝とともに、「君たちはみんなで心を合わせて、復活の望みに立て」ということを教えたのです。コリント前書と一緒に。コリント前書の15章に復活のことが出ておりますけれど、ピリピ書でも、よく読んでみてください。はじめの第1章に「イエスの復活」が強調されている。キリスト教は、いかに難しいか。「天国」と口で言っているけれど。この「復活の望み」、「天国」と言うのは、人間にとっていかに難しいかと言うことが分かる。

クリスチャンはむしろ傲慢

分かっていない証拠に、人を赦す精神がないのですよ。われわれの心に平安がないでしょう。われわれには平安な心がなく、人を赦すというような精神もない。落第生ですよ。ちっとも分かっていない。

それに自分では「いや、俺は信者である」と思っている。ちょっと10年ぐらい教会に来たら皆、信者顔をしている。そうですからクリスチャンは人に嫌われるんですよ。この頃のクリスチャンは普通の人よりも嫌われる。あれがクリスチャンかと。普通の人の方が立派ですよ、クリスチャンは、むしろ、俺は善行しているというような傲慢心をもっている。私はこのごろそういう気がしますね。

そうですから長らく教会へ来ていても、ちっとも信仰が分かっていない。自分の考えを振り回している。聴こうという精神がないんだから、「ああ、小西が説教している、参考に聴いておこう」というような頭で聞いていますから、参考になっているけれど、ちっとも小西の信仰が移っていない。けれども、それでは何十年来ていただいても、私の持っているものは宇う t らない。新しき酒は新しい革袋に入れなければならない。自分の革袋を振り回していたら、汝ゆ年来ていただいても、それは望みが薄い。移らない。

イエスの凶るべからざる謙遜

イエスは死ぬまで神の意見に従って、従順であられた。おのれを低くした。謙遜の手本です。パウロは「ピリピ人よ、貴方方もイエスのこの謙遜に倣って、信仰相応に謙遜になれ」と言ってピリピ人に勧めた。

イエスの詩はもっと続くのでありますが、イエスのこの謙遜によって、神は彼を高く引き上げて復活させ、自分の右に座らせて、全ての名にまさる名を彼に賜ったという。その目的は、イエスの名によって天上の者、地上のもの、地下のものなど、あらゆる生物、あらゆる人間、あらゆる intellect 知恵を持っている生物、あらゆるものが膝をかがめ、またあらゆる舌が、「イエス・キリスト主である」と告白して栄光を父なる神に帰するためである。このイエスのはかるべからざる謙遜によって、はかるべからざる報酬を神がイエス・キリストに与えた。神は無限の富をイエス・キリストに与えた。イエス・キリストがもらったものは、人類の救い、人類のみならず、地上、地下、あらゆる生物の救いの鍵であった。神はイエスに救いを与えた。力を与えた。それは神の栄光のためである。こう書いてあるわけです。

イエス・キリストの復活が、パウロの一枚看板

イエス・キリストが復活したということがパウロの一枚看板です。これによって贖いが完成したことを意味する。ロマ書第 4 章の終わりに「イエスが十字架に付けられたのはわが罪のため、イエスが復活したのはわが義のため」と書いてある。すなわち復活が救いの成就であるというのがパウロの主張ですから、イエス・キリストを論ずるときには必ず復活が出てこなければならない。…

聖霊が我々に臨むときにそのイエス・キリストの救いが分かる。イエス・キリストの贖いの深さ、広さ、真実さが分かる。信仰ではない。知恵です。信ずるのではありません。聖霊がわれわれに臨むときに、この世においてある程度、われわれの理性をもってこれを極めることができる。これは我々の知性 intellect の問題です。

わが主イエスよ

「イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が「イエス・キリストは主であると告白する。」（ピリピ書 2 章 10, 11 節）

あらゆる舌が「イエス・キリストは主であると告白する。」ということは、パウロがロマ書 10 章 9 節、10 節に救いの条件として挙げた。「主イエス・キリストは主であると告白する」というこの文句は、実に人類の救いの完成を意味する。

そしてパウロはこの「告白する」という字を、ロマ書 10 章 13 節においては、もっとたやすい「言い表す」という字に変えた。パウロは、ただ「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ者にまでこれを広げた。イエスが成就したこの贖いの救いの完成を、「イエスはわが主なり」という告白よりももっと簡単なものにして、ただ「わが主イエスよ」と口で言い表すところにまでパウロは説明した。贖いの救いの力の無限なることをパウロは説明した。

あらゆる者がひざをかがめ、あらゆる舌が告白するという。あらゆる人の救いの完成に自分が含まれている。この文句は、「われも救われることは確実なり」という確信を人類に与える。

よろしいか。すべての人が救われるのだから、自分みたいな無信仰の者、落第生も救いのうちに数えられている。それを贖いの力という。60年間朝な夕な聖書を勉強しても分からない落第生である小西芳之助が救いのうちに含まれている。小西芳之助の救いは确实だと、こういう信仰が起こってくる。